

にし
西 遺 跡

2002

財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター



西遺跡遠景（東より）

序

私たちにとって先人が残した文化財は、郷土の歴史を理解する上で、大変貴重な財産です。この文化や伝統を継承することは、21世紀を向えて活力と潤いに満ちた社会を創造するために欠くことのできないものです。これらの文化財を損なうことなく未来へ伝えていくことは、今、私たちに与えられた課題であるといえます。

財団法人山口県教育財団では、埋蔵文化財保護の立場から、やむを得ず消失することになった地域については、発掘調査を実施し、記録保存を行うこととしております。このたびも、一般国道2号植生バイパス建設工事に先立ち、工事によって失われる範囲について、発掘調査を実施いたしました。

調査の結果、中世の集落跡が発見されました。また、本遺跡からは、土師器をはじめとする数多くの土器類や石製品などが出土しました。これらの資料は当時の人々の暮らしを考える上できわめて貴重で、ふるさとの歴史に新しい事実を加えるものです。

本書が、文化財保護に対する理解を深め、教育並びに学術研究としての資料、また、郷土史の基礎資料として、広く活用されることを願うものであります。

おわりに、調査の実施にあたって御協力いただいた関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

財団法人 山口県教育財団

理事長 牛見 正彦

例 言

- 1 本書は、平成13年度に実施した、西遺跡（山口県山陽町大字埴生字西）の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、国土交通省所管一般国道直轄改修事業に伴い、財団法人山口県教育財団が国土交通省中国地方整備局山口工事事務所の委託を受けて実施したものである。
- 3 調査組織は次の通りである。

調査主体 財団法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター

調査担当 指導主事 西田 宏

調査研究員 小南 裕 一

調査員 池山 正

- 4 調査に当たっては、山口県教育委員会、国土交通省中国地方整備局山口工事事務所、山陽町教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を得た。
- 5 本書の第1図は、国土地理院発行2万5千分の1地形図「小月」を複製使用、第2図は国土交通省中国整備局山口工事事務所提供のものである。
- 6 出土遺物のうち石製品の石材鑑定は、山口県立山口博物館専門学芸員 亀谷 敦 氏に依頼した。なお石材鑑定は表面観察によるものである。
- 7 本書に使用した方位は、国土座標（第3座標系）の北で示し、標高は海拔標高で表した。
- 8 本書に使用した土色の色調の表記は、農林省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』Munsell方式に従った。
- 9 図版中の遺物番号は、実測図の遺物番号と対応する。
- 10 土器実測図の断面は、白抜きが土師器・瓦質土器・陶磁器、黒塗りが須恵器を表す。
- 11 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。
SB：建物 SK：土坑 SP：柱穴 SD：溝状遺構 SX：不明遺構 TR：トレンチ
- 12 本書の作成・執筆は、西田・小南・池山が分担作成し、西田が編集した。

本文目次

I	遺跡の位置と環境	1
II	調査の経緯と概要	4
III	遺構と遺物	7
	1 掘立柱建物	
	2 土坑	
	3 溝・柱穴	
	4 不明遺構	
	5 遺物包含層	
IV	まとめ	25



石山より墳生と周防灘を望む

図版目次

巻頭図版	西遺跡遠景(東より)		SK7 遺物出土状況
図版1	西遺跡近景(北より)	図版8	SP42・53 SD2 遺物出土状況
	西遺跡全景(東より)		SK20・21・22・23・24完掘
図版2	西遺跡東側(東より)	図版9	TR2・3・4・5完掘
	SX7周辺遺構(東より)		遺物包含層内遺物出土状況①②③
図版3	SK5・10・11遺物出土状況		遺物包含層内礫・流木出土状況
	SK5・10・11完掘	図版10	TR3・5土層断面
図版4	SK12・13・14遺物出土状況	図版11	SB1関連出土遺物
	SK13・14完掘		SK5・10・11・12出土遺物
図版5	SK15遺物出土状況	図版12	SK6・7・9・13・14・15・16出土遺物
	SK6・9・14・15・17完掘	図版13	SD2 SP16・42・53・60・63・75
	SK19土層断面		SX7出土遺物
図版6	SK6土層断面A・B・C	図版14	遺物包含層内出土遺物①
図版7	SK6土層断面C・D	図版15	遺物包含層内出土遺物②

挿図目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡……………1	第16図	SK14・15出土遺物実測図……………12
第2図	調査区設定図……………5	第17図	SK5・6・7・8実測図……………13
第3図	遺構配置図……………6	第18図	SK6・7出土遺物実測図……………14
第4図	SB1・2実測図……………7	第19図	SK9・13・16・17・18・19実測図……………14
第5図	SB3・4実測図……………8	第20図	SK20・21・22・23・24実測図……………15
第6図	SB1関連遺物実測図……………8	第21図	SK9・13・16出土遺物実測図……………15
第7図	SK5実測図……………8	第22図	SD1・2SP53実測図……………16
第8図	SK5出土遺物実測図……………8	第23図	SD2SP16・42・53・60・63・75
第9図	SK10実測図……………9		出土遺物実測図……………16
第10図	SK10出土遺物実測図……………9	第24図	SX8実測図……………17
第11図	SK11実測図……………10	第25図	SX7周辺実測図……………18
第12図	SK11出土遺物実測図……………10	第26図	SX7出土遺物実測図……………19
第13図	SK12実測図……………10	第27図	遺物包含層内出土土器実測図……………20
第14図	SK12出土遺物実測図……………10	第28図	遺物包含層内出土土製品実測図……………20
第15図	SK14・15実測図……………11	第29図	TR3・5土層断面図……………21・22
		第30図	遺物包含層内出土土器実測図……………23

I 遺跡の位置と環境



- 1西遺跡 2大持石棺 3龍福寺跡 4高山古墳 5中村遺田古墳群 6道田経塚
 7平松古墳群 8路鬼山城跡 9長友別府台遺跡 10七日町遺跡・七日町古墳群
 11中ノ浴古墳 12板垣城跡 13長光寺山古墳 14正法寺講堂僧坊跡
 15万人塚古墳 16千人塚古墳 17栗遺跡 18妙徳寺山経塚 19妙徳寺山古墳
 20吉部田遺跡 21厚陽貝塚 22後湯台ノ田古墳 23湯牟田遺跡 24高泊二ノ河原田遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

地理的環境

西遺跡は厚狭郡山陽町大字植生字西に所在する。

山陽町は交通の要衝で、JR山陽本線・国道2号線が東西に走り美祿市や山陰地方をつなぐJR美祿線および国道316号線の南起点となっている。近年山陽新幹線の厚狭駅が完成し、今後更なる発展が予想される。

西遺跡はJR山陽本線植生駅の南420mに位置し、高山(103m)東麓の河岸段丘上、標高約10mを測る。

山陽町は、西に下関市、東に厚狭郡楠木町、南に小野田市、北に美祿市と隣接し、山口県の西南部瀬戸内側に位置する。中国山地脊梁が徐々に高度と起伏を減じながら緩やかな丘陵となって周防灘に没していくその接点にあたる。松岳山(約324m)の山塊を中心として東に日ノ岳山地、西に石山山地が連なり、石山山地南麓に植生低地は広がる。

植生低地は前場川、糸根川下流域に広がる狭小な谷底平野である。10~20mの一段高い砂礫段丘と低い平坦面からなっている。前場川、糸根川はともに小河川であるため河口域の三角州平野はきわめて小規模である。しかし、後背山地は風化しやすい中世代白亜紀の花崗岩地帯であることから河口域の海浜地帯は様々な変化に富んでいる。

歴史的環境

山陽町内では厚狭盆地を取り囲む丘陵上に多くの遺跡が存在するが植生低地周辺は少ない。ここでは、縄文時代から中世にかけての主な遺跡の概略を述べる。

縄文時代の遺構をもつ遺跡は確認されていないが、厚狭川東岸の積積台地上に立地する湯牟田遺跡では縄文時代草創期の石器が採集されていることからこの時代にはすでに山陽町内で人が活動を行っていたことは確実である。

弥生時代の遺跡もわずかながら存在するが、開発、耕作による発見であるため極めて限られた資料にとどまっている。粟遺跡では弥生時代終末期の竪穴住居2棟が確認されている。また妙徳寺山古墳周辺の土抗から5点の石甕丁が一括して出土している。これらの遺跡は丘陵部に位置するが、厚狭盆地西辺部の低地でも遺物が採集されている。

古墳時代になると山陽町内にも古墳が築かれるようになる。その代表格が長光寺山古墳と妙徳寺山古墳である。

4世紀後半に築造された長光寺山古墳は、厚狭盆地を北の眼下に見下ろす丘頂に立地した全長約58mの畿内型前方後円墳である。後円部の二基の主体部は墳丘の中軸にほぼ平行し、割形形木棺を埋納した竪穴式石室である。副葬品には、三角縁神獸鏡3面と内行花文鏡1面、碧玉製鍔形石および巴形石製品や筒形銅器、鉄製品などがある。被葬者は三角縁神獸鏡が副葬されていたことから畿内政権に従属していたものと思われる。

妙徳寺山古墳は4世紀後半~末に築造された全長30mの前方後円墳である。後円部の主体部は石棺系竪穴式石室である。副葬品には、振文鏡、多くの勾玉、管玉および鉄製の刀子、剣などがある。

前述の前期古墳と異なり山陽町内の後期古墳は発掘調査があまり行われていないため詳細は明らかではないが、下記の古墳は築造時期が判明している。平松古墳群は津布田字ヶ辻の海岸段丘の奥まっ

た地に所在する。平松古墳群1号墳は北九州の影響を受けた複室構造の石室を有することから6世紀後半に比定されている。中村道田古墳群は中村と道田を境とする丘陵地帯に展開する。中村道田古墳群は6世紀末ないし7世紀に入って築造が始まり、つづく中村道田古墳群の北西約200mに位置する高山古墳への埋葬を以って山陽町の古墳時代は終末を迎える。

なお、古墳時代の集落は吉部田遺跡において確認されており、須臾器、土師器が出土している。

律令制成立以後、班田收受を効率的に行うための条里制、および都と各地を結ぶ官道が整備された。厚狭川右岸の盆地床北西部に条里制の痕跡が認められている。官道のひとつの山陽道は都と大宰府を結ぶ一級官道であり、厚狭、埴生に駅が置かれた。また、厚狭は山陽道と山陰道の連結の地であった。

前述した吉部田遺跡では、平安時代末から室町時代にかけての集落遺構が確認されている。出土遺物には土師質土器、瓦質土器、石白などがある。

厚狭川河口西岸に位置する厚陽貝塚では多数の貝類とともに瓦質の足鍋が出土している。よって貝塚に隣接して中世の村落の存在が推定されている。足鍋は山口県下では普遍的にみられる遺物である。

しかし、他県での出土は極めて少なく、防長地域を特色づける土器である。中世の貝塚である希少性ととともに山口県地域の中世土器研究の端緒となった点で意義を持つ遺跡である。

西遺跡からは上記の遺跡と比較すると瓦質土器はあまり出土しておらず、多くの磁器類、土玉を有することから前述した中世集落跡とは異なる様相を呈する。

一方、信仰の面では平安時代中期に末法思想が流行し、町内でも経塚が築かれるようになる。

長光寺山経塚は長光寺山古墳の後円部頂に位置する。出土遺物には山吹双鳥鏡1面、湖州鏡1面、陶製経外筒、青白磁合子などがある。

物見山経塚は物見山頂上に立地し、出土遺物には宝塔鈕銅製経筒、経外筒紙本写経文、鉄刀などがある。

妙徳寺山経塚は厚狭川流域の盆地を眼下に収める標高約60mの丘陵頂上部に位置し、二基の経塚が確認されている。出土遺物には、草花双雀鏡1面、湖州鏡1面、鉄製刀子、白磁四耳壺、白磁碗青白磁合子、銭貨などがある。なお、埴生地域には道田経塚が所在するものの、詳細は不明である。

山陽町は古墳時代に畿内政権による九州制定および朝鮮半島進出への要と目され、また古代には山陽道の駅が置かれたことが示すように古くから交通の要衝であった。今日においてもその役割を担っている。

今回の西遺跡の調査は遺跡の希少な埴生地域における中世集落の存在が確認されたことによって、厚狭地域の集落である吉部田遺跡、厚陽貝塚と比較するうえでも重要な遺跡といえる。

参考文献

山陽町教育委員会	『山陽町史』	1984
山口県教育委員会	『妙徳寺山古墳・妙徳寺山経塚・渠遺跡』	1991
山陽町教育委員会	『物見山経塚』	1978
山陽町教育委員会	『長光寺山古墳』	1977
山口県埋蔵文化財センター	『吉部田遺跡』	1998
小南裕一	「山口県における縄文時代開始期前後の石器群」『九州旧石器第4号』九州旧石器文化研究会	2000

II 調査の経緯と概要

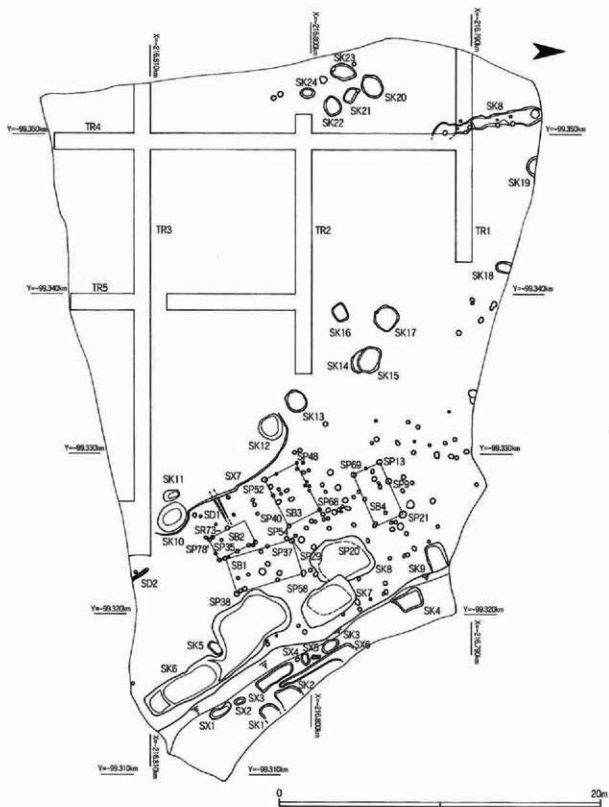
国土交通省中国地方整備局山口工事事務所は、山陽町埴生地区の朝夕のラッシュ時などの交通渋滞の緩和と交通事故の解消を目的に4車線の道路（一般国道2号 埴生バイパス）の整備を計画した。事業を施行するにあたり削平が工法上避けられない範囲について埋蔵文化財の埋存が予想されるため、当該地域について、平成9年12月予察調査を行い、この結果を踏まえて山口県教育委員会では国土交通省中国地方整備局山口工事事務所と協議を行い発掘調査の対象となる範囲を設定した。調査にあたっては、財団法人山口県教育財団が国土交通省中国地方整備局山口工事事務所から委託を受けて行うこととなった。

平成13年4月より事前の諸準備を開始、4月23日から器材を搬入し本格的な発掘調査を開始した。

まず、地層と遺構の分布を詳細に把握するためトレンチを設定し、人力により掘り下げた。その結果、層序は基本的に上位より耕土、盤土、遺構面であるが、調査区の中央より西側では盤土下に遺物包含層の存在を確認した。地山は西側でやや高位であるもののほぼ平坦であり、調査区南西端方向に徐々に低位になっていることが予想できた。5月8日、10日の2日間で土色の変化に細心の注意をはらいながら、重機を使って表土除去を行った。翌日から人力による遺構検出を開始した。その結果、調査区の西側、北側、および中央より東側において、土坑、溝、柱穴とみられる遺構を多数検出した。また、中央より南西方向に広がる遺物包含層の範囲を確認した。遺構検出の作業終了後、遺物包含層の掘り込み作業を行った。遺跡の半分近くを占める遺物包含層については、調査期間を考慮してトレンチによる調査とした。掘り込みについては、十分安全に配慮しながら作業を進め、深いところで深さ70cm程度（砂層）までの掘り込みで終了した。調査の結果、包含層上位層～中位層より土師器、瓦質土器、磁器、須恵器および土鈿、土玉等の土製品等を検出。中位層から下位層より縄文土器片とみられる破片数点を検出。各層より石鈿、黒曜石剥片、スクレイパー、扁平打製石斧、などの多数の貴重な資料を検出することができた。また、地山の南西方向への落ち込みを確認した。トレンチ部分について、遺物包含層の堆積状況を実測した後、遺構の掘り込みを開始した。遺構については、水田化の際の削平を受け、浅いものが多いものの、鎌倉時代の土坑をはじめ、柱穴、溝状遺構、掘立柱建物など多数を検出した。調査区中央部の傾斜地上から土師器・磁器などが多数出土した。梅雨の集中豪雨により排水作業、安全対策など困難な作業が続いたが、7月3日、遺構の掘り込み作業を終え、遺跡の清掃をした後、7月4日、空中撮影用ヘリコプターで遺跡の空中撮影を行った。その後、未調査の遺物包含層について遺物収集を進めながら、残った遺構の写真撮影・実測を進めた。発掘調査の結果については、その概要について現地説明会を行った。調査期間中、山陽町立埴生中学校の生徒や地域の方々が遺跡見学や発掘体験学習に参加されるなど、西遺跡を地域の教育の場として活用していただいた。平成13年7月13日、現地での調査はすべて終了した。

本調査では、前記のように中世を中心に貴重な資料が多数出土した。4月から始まった発掘調査は、降雨による多少の困難に見舞われたが、事故やケガもなくほぼ順調に終えることができた。これも、関係各位の多大なご理解・御協力・ご支援によるものと感謝する。

出土遺物は、復元・実測を山口県埋蔵文化財センターで行い、また調査資料を整理して、この報告書を刊行した。



第3圖 遺構配置図

Ⅲ 遺構と遺物

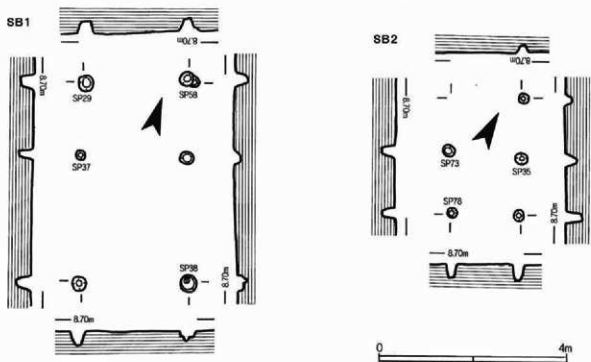
本遺跡は、標高約8.4~9.0mの台地上に広がり、遺構面はほぼ平坦である。この平坦面は、遺跡の東方を南流する前場川が形成した河岸段丘面の可能性があり、調査区の西側約30m付近が、埴生地区中央にそびえる高山(103.6m)の東麓にのびる丘陵の先端部である。遺構面は調査区の西側、北側及び中央部より東側で確認でき、中央から南西方向に広がる遺物包含層を囲むように展開する。西側遺構面は遺跡の東側及び北側で黄褐色土、西側で灰白色粘質土である。

各遺構は、後世の水田開発により削平を受けており、当時の規模から見ればかなり浅いものになっている。東側中央付近で遺構の密度が高く、調査区南東側では希薄である。検出された遺構は、中世の掘立柱建物4棟、土坑24基、溝状遺構2条、柱穴約170個、不明遺構7基である。遺物については、縄文時代のものと思われる土器片・石器、古墳時代の須恵器も出土しているが、全体としてみれば中世の土師器、瓦質土器、磁器が大半を占める。土玉、土錘等の土製品も多数出土した。

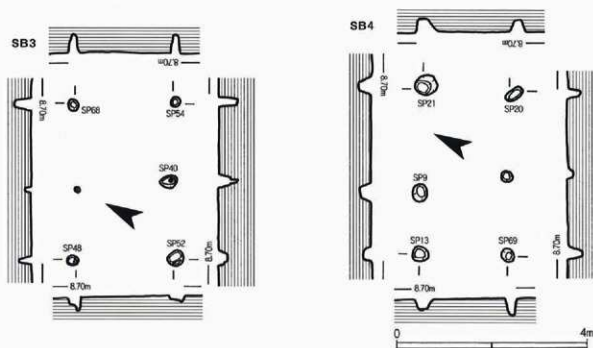
以下に、主要な遺構と遺物を紹介する。

1 掘立柱建物

本遺跡では、掘立柱建物は4棟が復元できた(第4図)。建物は、標高約8.5mに建てられている。4棟は隣接している。棟方向は若干の振れはあるが、2棟がほぼ南北方向を向いており、他の2棟はほぼ東西を向いている。柱穴の埋土、配置、出土遺物などから4棟ともほぼ同時期のものと推定する。
SB1(第4図) SB1は調査区中央やや東寄りに建てられた1間×2間の建物。棟方向はN20°W。桁行長4.2m、梁行長2.3mの規模をもち、6本の柱で構成される。柱穴は、直径23~40cm、深さ13~31cmである。SP29から土師質鍋片1点(第6図1)、SP38から土師器片、SP58から土付坏1点(第6図2)が出土した。柱穴の埋土や遺物から、この建物は12~13世紀のものとして推定される。 S

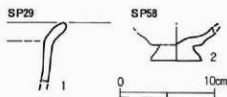


第4図 SB1・2実測図



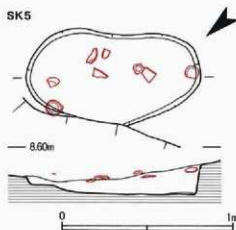
第5図 SB3・4実測図

B2 (第4図) 調査区中央南側に位置し、SB1の西側に隣接して検出された。西側梁の柱穴1個が確認されなかったが、1間×2間の建物と考えられる。棟方向はN28°W。桁行長2.5m、梁行長1.5mの規模をもつ。柱穴は、直径20～27cm、深さ16～38cmである。SP13・78から土師器片、SP35から土師器碗底部片1点が出土した。12世紀頃の建物と推定される。



第6図 SB1関連遺物実測図

SB3 (第5図) SB2の北側に位置する1間×2間の建物。棟方向はN65°E。桁行長3.3m、梁行長2.1mの規模をもち、6本の柱で構成されている。SP48・52から土師器細片、SP54から土師器碗片1点、SP40から土師器碗底部片1点・口縁片1点、SP68から土師器皿片1点が出土した。11～12世紀の建物と推定される。



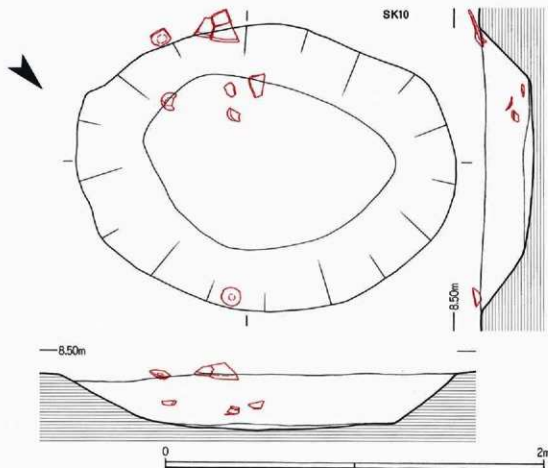
第7図 SK5実測図

SB4 (第5図) 調査区中央北寄りに位置する1間×2間の建物。棟方向はN65°E。桁行長3.5m、梁行長1.8mの規模をもつ。柱穴は直径22～48cm、深さ15～35cmである。SP9・20から土師器片、SP21から土師器碗片3点が出土。12世紀頃の建物と推定される。

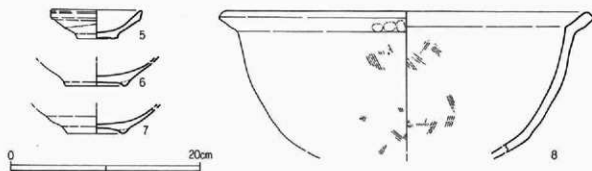


第8図 SK5出土遺物実測図

第6図では、SB1関連遺物を紹介する。1



第9図 SK10実測図



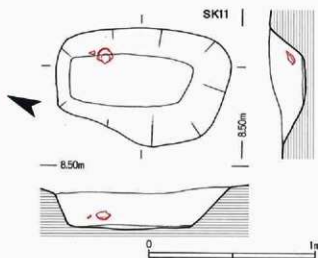
第10図 SK10出土遺物実測図

はS P29出土の土師質銅片であり、外面に炭素が付着する。2はS P58出土の土師器台付坏である。口縁部は欠損しているが、内底面中央に指頭圧による凹みがある。外底面に回転糸切りの底跡が残る。

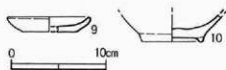
2 土坑

今回の調査では、24基の土坑を検出した。土坑は調査区の東側、中央部、及び西側に集中する。検出された土坑の大半は後世の開発のため削平を受けて、底面がわずかに残っているだけであるが、SK6・7・8は残存状況が良好である。ほとんどの土坑から遺物が出土しており、時期の明らかな土坑については大半が12世紀頃のものである。以下、主な土坑について述べる。

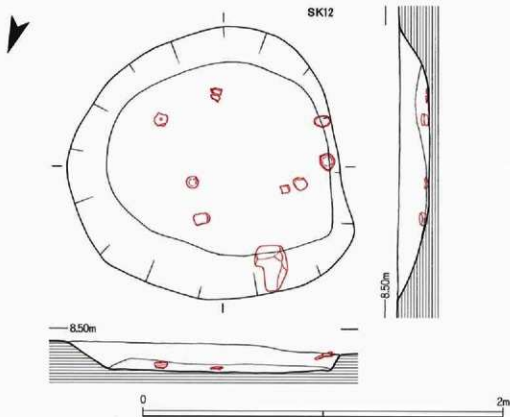
SK5 (第7図 図版3) 調査区の南東側に位置し、土坑の北側の一部をSK6の中央部に切られた状態で検出された。平面形は長円形である。N46°Eに主軸をとる長軸105cm、短軸54cm、深さ20



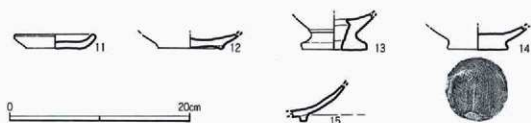
第11圖 SK11実測図



第12圖 SK11出土遺物実測図



第13圖 SK12実測図



第14圖 SK12出土遺物実測図

cmである。埋土は黒褐色土の単層であり、土師器片多数とともに土師器皿1点、土師器椀口縁片1点(第8図3・4)が出土した。12世紀頃の遺構と推定される。

第8図1・2はSK5出土の遺物である。3は土師器皿である。底部外面は回転糸切りされている。4は土師器椀である。口縁端部がやや外反する。内外面ともに回転ナデ。

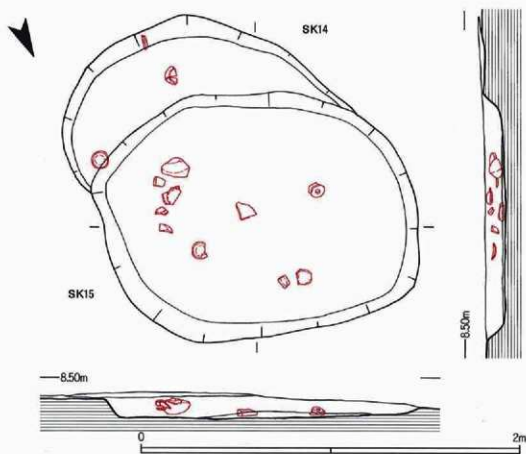
SK10(第9図 図版3) 調査区中央南側に位置する。平面形は長円形である。N47°Wに主軸をとり、長軸202cm、短軸150cm、深さ31cmである。埋土は黒褐色土の単層である。埋土中より土師器片・瓦質土器片とともに、土師器椀底部片2点、瓦質土器鍋1点、青磁皿1点(第10図5・6・7・8)が出土した。用途は不明であるが11~12世紀の遺構と推定される。

第10図はSK10出土の遺物である。5は輸入青磁皿である。高台付近を除きオリーブ黄色の釉が施されている。6・7は土師器椀である。ともに口縁部が欠失しているが、残存部分については内外面ともに回転ナデ。貼り付け高台。8は土師質土器鍋である。体部内外面ともにハケ目調整で口縁部はナデ。

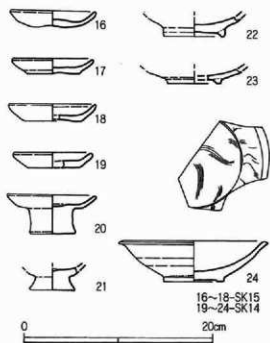
SK11(第11図 図版3) SK10の西側に隣接する。平面形は不整長円形である。N24°Wに主軸をとり、長軸110cm、短軸70cm、深さ26cmである。埋土は黒褐色土の単層であり、埋土中より土師器皿1点、土師器椀底部片1点(第12図9・10)が出土した。11~12世紀の遺構と推定する。

SK11の出土遺物は第12図に掲載した。9は土師器皿である。内外面ともに回転ナデ、底部外面に回転糸切りの痕跡を残す。10は土師器椀底部である。貼り付け高台。

SK12(第13図 図版4) 調査区中央に位置し、長軸164cm、短軸154cm、深さ16cmのほぼ円形の



第15図 SK14・15実測図



第16図 SK14・15出土遺物実測図

中央や北寄りで見出された。SK14がSK15に切られる。N63°Wに主軸をとる。SK15は長軸160cm、短軸128cm、深さ14cmで、長円形の平面形をもつ。埋土は黒褐色土の単層で、埋土中より土師器皿1点、土師器台付皿2点、土師器椀片2点、白磁碗1点、有孔台付坏の破片1点(第16図19~24)が出土した。11~12世紀頃の遺構と推定する。

SK15はSK14の南側に土坑の一部が残存する。平面形及び規模はSK15に類似していたものと考えられるが、遺構の上位部分は著しく削平を受けており、残存部分の深さは最大4cmである。埋土は、黒褐色土の単層であり、地山面直上より土師器皿3点(第16図16~18)が出土した。12世紀頃の遺構と推定する。

第16図はSK14・15出土の遺物である。16~19は土師器皿である。底部には回転糸切りの痕跡を残す。20・21は土師器台付皿。22・23は土師器椀片である。内外面とも回転ナデ。貼り付け高台。24は白磁碗である。内外面に明緑灰色の釉が施される。内面に劃華文をもつ。

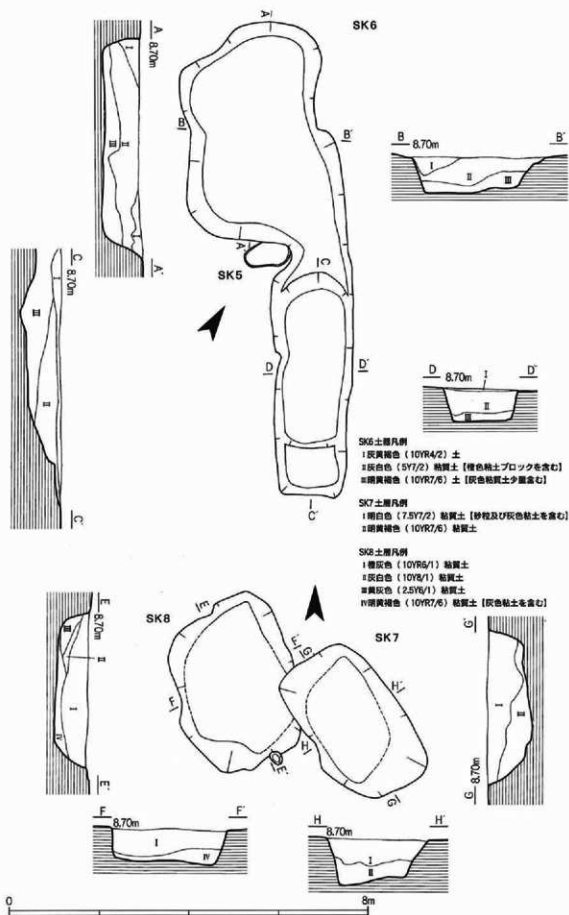
SK6・7・8(第17図 図版5・6・7) これらの遺構は調査区東側に位置している。土層観察の結果SK7はSK8を切っていることを確認した。SK6はSK7の南端より50cm南側に隣接しており、本遺跡において最も規模の大きい遺構である。これらの遺構の埋土には数種の粘質土がブロック状に混入しており、廃棄土坑と考える。遺構の周辺には明瞭な粘土層を確認することはできなかったが、褐色粘質土層に掘り込まれており、粘土または陶土等の探掘坑であった可能性も考えられる。SK6から土師器皿2点、土師器坏底部2点、土師器椀片1点、土師器台付皿片1点、土錘1点、石鏝1点、陶器片が出土した(第18図25~29・31~33)。SK7より土師器片多数及び土師器椀底部1点(第8図30)が出土した。SK8より土師器片多数が出土した。これらの土坑からの出土遺物の中に近世のものと思われる陶器片が含まれており、近世の遺構の可能性はある。

SK6はN40°Wに主軸をとる。長軸10.6m、短軸1.2m、深さは中央の深いところで0.8mを計る。

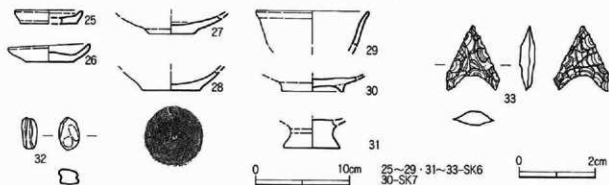
土坑であり、SK13と隣接する。埋土は黒褐色の単層であり、埋土中より人頭大の礫とともに土師器皿1点、土師器椀底部片1点、土師器有孔台付坏底部1点、土師器坏1点、白磁碗片1点(第14図11・12・13・14・15)、及び木炭片が出土した。用途は不明であるが11~12世紀の遺構と推定できる。

第14図はSK12出土の遺物である。11は土師器皿である。底部外面に回転糸切りの痕跡が残る。12は土師器椀の底部片。13は土師器有孔台付坏であり、底部に穿孔がある。14は底部の厚い土師器坏である。底部外面に回転糸切りの痕跡を残す。15は白磁碗片である。高台付近を除き釉が施されている。

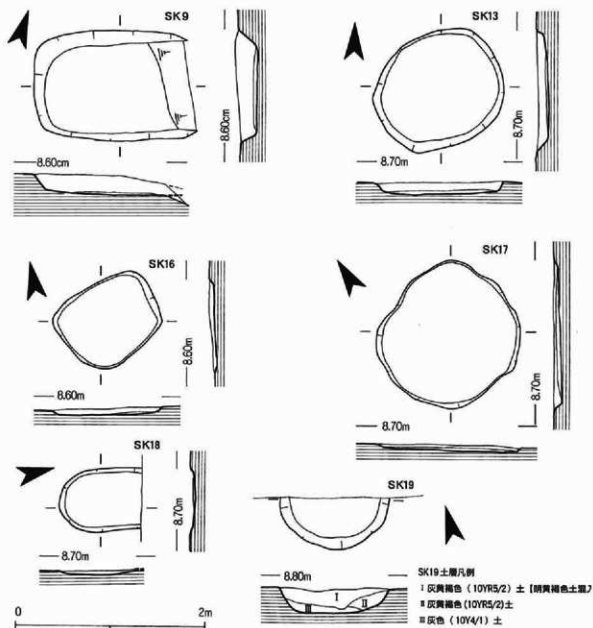
SK14・15(第15図 図版4・5) 調査区中



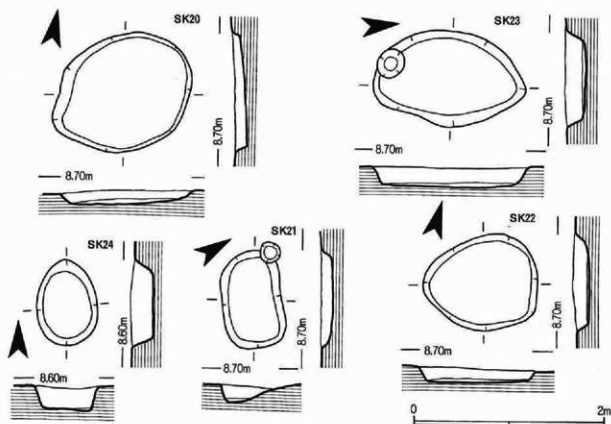
第17図 SK5・6・7・8実測図



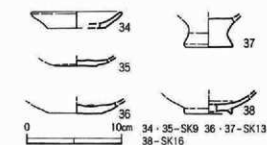
第18图 SK 6・7出土遺物実測図



第19图 SK 9・13・16・17・18・19实测图



第20図 SK20・21・22・23・24実測図



第21図 SK9・13・16出土遺物実測図

不整形の土坑である。埋土は灰褐色土、灰白色粘質土、明黄褐色粘質土の3層。

SK7はN30°Wに主軸をとり、長軸3.6m、短軸2.0m、深さ約1.0mの隅丸長方形の土坑である。埋土は、明白色粘質土、明黄褐色粘質土の2層。

SK8はN30°Wに主軸をとる。長軸3.4m、短軸2.8m、深さ0.8mの隅丸長方形の土坑。埋土は、褐灰色粘

質土、灰白色粘質土、黄灰色粘質土、明黄褐色粘質土の4層である。

第18図にSK6・7出土の主要な遺物を紹介する。25・26は土師器皿、27・28は土師器環であり底部に回転糸切りの痕跡を残す。29は土師器椀片内外面とも回転ナデ。30は土師器椀底部、貼り付け高台。31は土師器台付皿。底部外面に回転糸切りの痕跡を残す。32は土甕。33は石織である。玄武岩を石材として使用している。

SK9 (第19図 図版5) 調査区北東端に位置する。土坑の東側は検出できなかったが、隅丸長方形の平面形をもつと推定する。残存部分については、東西160cm、南北120cm、深さ22cmである。埋土は灰黄褐色土の単層であり、土師器皿1点、土師器環底部1点が出土した(第21図34・35)。12世紀頃の遺構と推定する。

SK13 (第19図 図版4) 調査区中央に位置し、SK12の北西側に隣接する。平面形はほぼ円形で、長軸140cm、短軸110cm、深さ13cmの規模をもつ。埋土は黒褐色土の単層である。土師器環底部1点、土師器台付皿底部1点、焼土塊が出土した(第21図36・37)。12世紀頃の遺構と推定する。

SK16 (第19図) 調査区中央に位置し、SK14の西側約2mの地点に隣接する。不整の楕円形の平面形を呈し、N80°Wをとる。長軸115cm、短軸100cm、深さ6cmの規模をもち、遺構の底部付近のみ検出された。埋土は暗褐色土の単層であり、土師器椀底部1点(第21図38)が出土した。12世紀頃の遺構と推定する。

SK17 (第19図 図版5) 調査区中央やや北側に位置する土坑である。長軸156cm、短軸140cm、深さ6cmの規模で、平面形はほぼ円形である。埋土は黒褐色土の単層で土師器片14点が出土。中世の遺構であるが、詳細な年代は不明である。

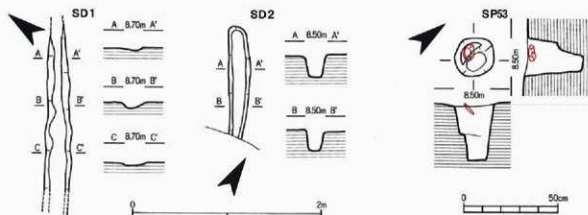
SK18 (第19図) 北側畦畔に切れ、遺構の南側のみ検出。検出部分の長さ86cm、幅76cm、深さ6cmである。埋土は褐灰色土の単層であり、出土遺物は土師器細片6点のみである。中世の遺構とみられるが、詳細な年代は不明である。

SK19 (第19図 図版5) 調査区北西端に位置し、遺構の南側のみ検出できた。検出部分の幅は112cm、深さ24cmである。埋土は灰黄褐色土(明黄褐色土混入)、灰黄褐色土、灰色土の3層である。出土遺物は土師器細片のみであり、詳細な年代は不明であるが、中世の遺構の可能性はある。

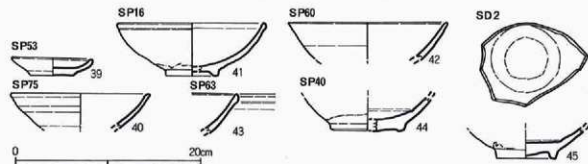
SK20・21・22・23・24 (第20図 図版8) これらの遺構は調査区西側に集中しており、灰白色粘質土に掘り込まれている。出土遺物からは詳細な年代は不明であるが、12~13世紀の遺構の可能性はある。

SK20はN45°Eに主軸をとり、長軸155cm、短軸120cm、深さ15cmである。平面形は不整長円形。埋土は灰黄褐色土の単層であり、土師器小片13点出土。

SK21は、N55°Wに主軸をとり、平面形は隅丸長方形である。遺構の北西側を柱穴に切られる。長



第22図 SD1・2 SP53実測図



第23図 SD2 SP16・42・53・60・63・75出土遺物実測図

軸103cm、短軸64cm、深さは深いところで16cmの規模をもつ。埋土は灰黄褐色土の単層であり、埋土中から土師器片13点、土師器坏底部小片1点が出土した。

SK22は、 $N80^{\circ}E$ に主軸をとる、楕円形の土坑である。長軸122cm、短軸102cm、深さ20cmの規模をもつ。埋土は灰黄褐色土の単層であり、埋土中から土師器小片が多数出土した。

SK23は、 $N5^{\circ}E$ に主軸をとる楕円形の土坑である。長軸160cm、短軸103cm、深さ20cmの規模をもち、遺構の南側を柱穴に切られている。埋土は灰黄褐色土（明黄褐色粘質土混入）の単層であり、土師質銅口縁小片1点、土師器坏底部片1点が出土した。

SK24は、 $N5^{\circ}W$ に主軸をとる楕円形の土坑である。長軸90cm、短軸65cm、深さ24cmの規模をもつ。埋土は灰黄褐色土（明黄褐色粘質土混入）の単層である。出土遺物は、土師器小片4点のみである。

第21図はSK9・13・16出土遺物である。34は土師器皿、35・36は土師器坏底部である。底部外面に回転糸切りの痕跡が残る。37は土師器台付皿の底部。38は土師器碗底部である。高台貼り付け。

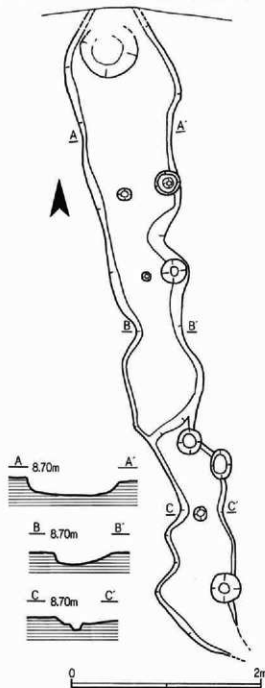
3 溝・柱穴

検出された溝は2条である。これらの溝は、後世の削平を受け底部面をわずかに残すのみである。そのため遺物も少なく、図化困難な破片が大半であり、図化できたのはSD2から出土した白磁碗片1点のみである。本遺跡からは約170個の柱穴が発見された。大半のものは、本来掘立柱建物を構成していたと考えられるが、復元されたものはわずかであった。ここでは、SD1・2、SP53について紹介する。

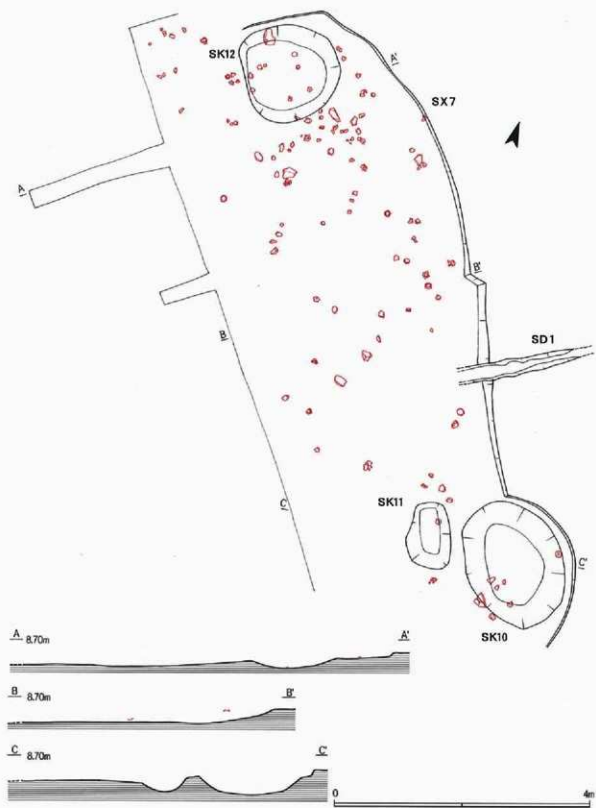
SD1（第22図） 主軸を $N60^{\circ}E$ にとる直線的な溝である。検出部の長さは170cm、幅は最大30cm、中央部では深さ8cmで浅い。埋土は灰黄褐色土の単層である。出土遺物は土師器細片のみであり、時期は不明である。

SD2（第22図 図版8） 調査区の南東端に位置し、主軸を $N35^{\circ}W$ にとる溝である。溝の先端部付近と考えられる。残存する長さは約110cm、最大幅22cm、深さは南東側で22cm。埋土はにぶい黄褐色土の単層であり、埋土中より土師器細片および白磁碗底部1点（第23図45）が出土した。12～13世紀の遺構と考えられる。

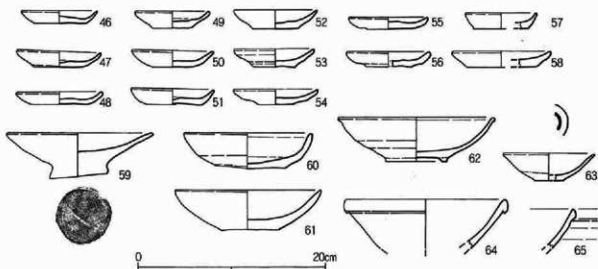
SP53（第22図 図版8） SD1の北側に隣接す



第24図 SX8実測図



第25图 SX7 周边实测图



第26図 SX 7 出土遺物実測図

る。長径23cm、短径20cm、深さ28cmのほぼ円形の柱穴である。埋土は黒褐色土の単層であり、土師器皿1点(第23図39)が出土した。遺物の出土状況から地鎮祭等の祭祀に伴う遺構である可能性もある。

第23図は溝・柱穴出土の遺物である。ここでは図化可能な遺物について紹介する。39はSP 53出土の土師器皿である。底部外面に回転糸切りの痕跡を残す。40はSP 75出土の土師器碗口縁である。内外面は回転ナデ調整。41は白磁碗である。高台付近以外に軸を施す。42・43は白磁碗口縁。44は白磁底部。高台付近以外に軸を施す。内面底部に沈線がある。45は白磁碗底部である。内面底部に蛇の目軸刺ぎを施す。

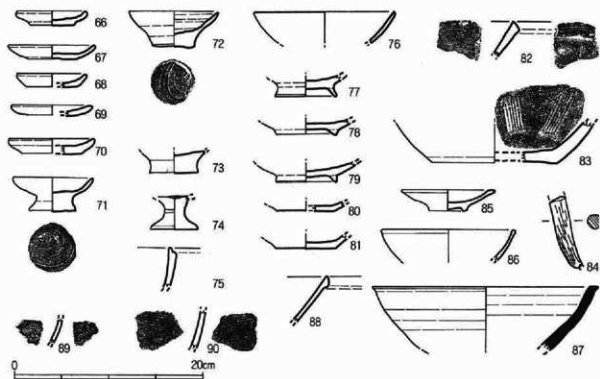
4 不明遺構

8基の不明遺構を検出した。主なものについて紹介する。

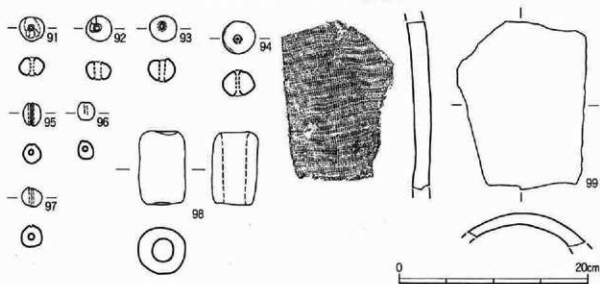
SX 8 (第24図) 調査区の北西側に位置し平面形は不整形である。遺構は北から南にのびる。遺構内には9個の柱穴が掘り込まれている。検出部の長さは6.5m、最大幅1.2m、深さは北側で16cm、南端付近で8 cmを測る。埋土は黒褐色土の単層である。遺物の出土は土師器細片、木炭細片のみであり、用途及び時期は不明である。

SX 7 (第25図 図版2) 調査区中央から南東にかけてSK 10・11・12を囲むように、東側の遺構面から標高差6~10cmの急傾斜を形成しており、西側の遺物包含層範囲に向かって緩傾斜面を呈する。この傾斜地帯をSX 7とした。急傾斜部の全面(緩傾斜面)の土坑周辺一帯の埋土内には土師器片多数とともに、土師器皿13点、土師器台付皿1点、坏2点、土師器碗1点、青磁皿1点、白磁碗片等が出土した。SX 7出土の遺物は、破片が大きく、器面の摩耗も少ないため、近い場所から投棄された可能性もある。出土遺物には11~12世紀のものが多い。

第26図にSX 7出土の主要な遺物を掲載した。46~58は土師器皿、内外面は回転ナデ、底部外面に回転糸切りの痕跡を残す。59は土師器台付皿、60・61は土師器坏。底部外面に回転糸切りの痕跡を残す。62は土師器碗、内外面は回転ナデ。貼り付け高台である。63は白磁皿。外面底部付近以外に軸が施され、内面底面に沈線がある。64・65は玉縁の白磁碗口縁片である。



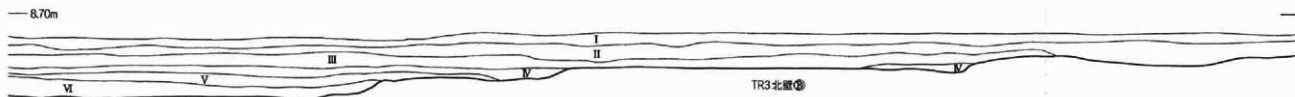
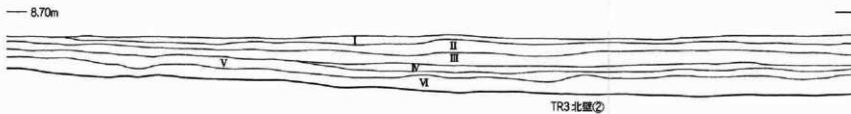
第27図 遺物包含層出土土器実測



第28図 遺物包含層内出土土製品実測図

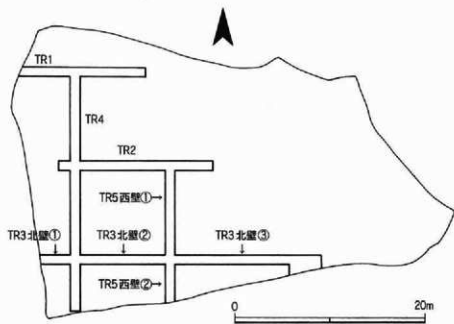
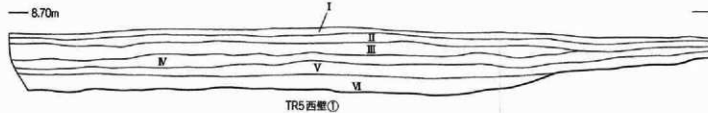
5 遺物包含層

検出状況・土層 (第29図 図版9・10) 調査区東側、北西端、及び西端の遺構面に囲まれた広い範囲で遺物包含層の堆積を確認した。トレンチ調査 (TR 1~5) により標高8.6m以下について、遺構面から続く無遺物層上面までの調査を行った。遺物包含層は調査区北西側及び中央部 (TR 1・TR 4北側・TR 2) で浅く、南西方向に深くなる。遺物包含層下の無遺物層 (青灰色粘質層) 上面の標高は次のとおりである。TR 1の最深部で約8.3m。TR 4は中央部で約8.2m、南側で8.3m。TR 3中央 (TR 3北壁②) で約7.9m。TR 3東側 (TR 3北壁③) で7.8mを測る。TR 5北側 (TR 5西壁①) では、北端付近 (標高8.18m) から南方向に高度を下げ、南端付近では標高約7.7mである。遺跡の南西側から北側に入り込んだ入り江状の旧地形が推測できる。入り江状の地形の岸は、TR 3の東端及びTR 4の南端付近



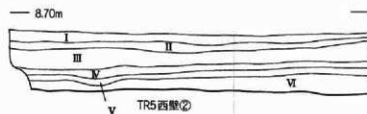
TR5 土層凡例

- I 黃褐色 (10YR5/6) 粘質土
- II 灰色 (N4/) 粘質土
- III 暗灰色 (N3/) 粘質土
- V 灰色 (7.5YR5/3) 粘質土
- IV 黃褐色 (2.5Y5/3) 砂
- VI 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土【砂混入】

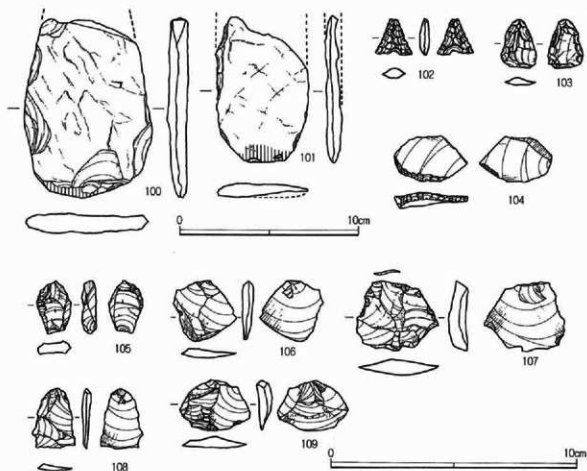


TR5 土層凡例

- I 黃褐色 (10YR5/6) 粘質土
- II 灰色 (N4/) 粘質土
- III 暗灰色 (N3/) 粘質土
- IV 灰色 (7.5YR5/1) 粘質土
- V 黃褐色 (2.5Y5/3) 砂
- VI 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土【砂混入】



第29圖 TR3・5 土層断面図



第30図 遺物包含層内出土石器実測図

とみられ、岸からの深さは最深部で深さ63cm、幅は約26m、と推定する。

遺物包含層の堆積状況は、調査区中央以北については灰色土の1層であるが、土師器、瓦質土器片、磁器片など中世の遺物が出土するが、古墳時代の須恵器(第27図87)も出土する(TR 4北側)。調査区中央(TR 2東側)出土の遺物の破片は大きく摩耗も少ない。調査区南西側及び南側の土層の堆積状況は全域にわたってほぼ同様である。

上層の黄褐色土は土師器、瓦質土器、磁器片を中心とする中世の遺物が出土するが、縄文土器小片(第27図89)扁平打製石斧(第30図100・101)、石鎌及び石鎌の未製品(第30図102・103)、黒曜石剥片(第30図106・107・109)なども出土。その下に灰色土があり、調査区南西側(TR 3西側)で10~18cm、南側(TR 5南側)で4~12cm、南東側(TR 3東側)で15~40cm堆積している。遺物は、土師器、磁器片、須恵器小片などが多量に出土するが、中世のものが大半を占める。その他、土玉、土鉢、中世のものとみられる瓦などの土製品(第28図91~99 図版9)、黒曜石楔形石器及び石鎌の未製品、黒曜石の剥片(第30図108・105)なども出土した。

中層は暗灰色粘質土・灰色粘質土層が調査区南西側で10~20cm、南側で10~22cm、南東側で8~28cm程度堆積する。中層以下は周辺湧水層の存在により帯水状態になり、遺物の出土は激減するが、植物遺体の保存状況は良好である。遺物には、縄文土器小片、植物種子・流木等の植物遺体がある。

下層は黄褐色砂・灰色粘質土（砂混入）である。一部兩層が互層を成す。TR4南側より縄文土器小片、調査区中央付近（TR5北側）から人頭大の礫とともに流木が出土した（図版9）。

第27図に遺物包含層出土土器、第28図に遺物包含層出土土製品、第30図には遺物包含層出土土器であり、図化可能な遺物について実測図を掲載した。66～70は土師器皿である。内外面ともに回転ナデ、底部外面に回転糸切りの痕跡を残す。71・72は土師器台付皿、73・74は台付皿底部である。71・72は内外面に回転ナデ、71～74は外部底面に回転糸切りの痕跡を残す。75は土師器鉢口縁。77～79は土師器碗底部である。貼り付け高台。80・81は土師器坏底部。82は瓦質土器握ね鉢口縁であり、内外面にハケ調整。83は瓦質土器摺り鉢、84は瓦質土器足鍋片である。85は白磁皿。外面底部高台付近以外に施軸。内面底部に蛇の目軸刺ぎを施す。86・88は白磁碗口縁である。87は須恵器の器台、89・90は縄文土器片である。91～94は土玉であり、孔は貫通している。95～98は土錘である。95～97は孔が貫通しており、沈線が1本ある。97は長さ7.8cm、幅4.8cmである。

出土土器 100は扁平打製石斧である。節理に沿った縦長の素材を用いており、側縁に若干の剥離を加えて成形している。身部上半を欠損し、残存長10cm、幅7.1cm、厚さ1.0cm、重量134gを測る。泥質片岩製。101も扁平打製石斧。刃部付近が若干残存しているのみで、残存長8.2cm、幅1.1cm、厚さ0.8cm、重量46.1gを測る。石材は泥質片岩である。102は短岳産黒曜石製の石鏃である。先端部ならびに基部を欠損する。残存長1.5cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重量0.7gを測る。103は石鏃の未製品と考えられる。裏面に主要剥離面が残っており、横長の剥片を素材としていたことがうかがえる。表・裏面ともに粗雑な成形剥離を加えた段階で廃棄されたものと考えられる。長さ2.0cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重量0.8gを測る。泥質片岩製である。104は水晶製のスクレイパーである。表裏面ともに素材面を残し、下縁部に表、裏面それぞれからブランディング状の加工を加え、刃部を作出している。長さ1.9cm、幅3.0cm、厚さ0.7cmを測る。105は楔形石器と考えられる。上部面に若干の潰れ痕が認められ、裏面には上下対向する剥離痕が存在する。腰岳産黒曜石製で、長さ2.2cm、幅1.4cm、厚さ0.5cm、重量1.8gを測る。

106～109は腰岳産黒曜石製の不定形剥片である。106は背面に打面側からの剥離痕が残る。自然面打面であり、寸詰まりで幅広の剥片である。長さ2.5cm、幅2.6cm、厚さ0.5cm、重量2.5gを測る。107は求心的な剥離痕を背面に残す。106同様、寸詰まりで幅広の剥片である。長さ2.5cm、幅3.2cm、厚さ0.7cm、重量6.1gを測る。108は若干縦長の剥片である。背面の剥離痕の観察から約90°の打面転移が行われていたことが推測できる。長さ2.5cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重量0.9gを測る。109は横長の剥片で、背面には打面側からのみの剥離痕が認められる。長さ2.1cm、幅2.9cm、厚さ0.5cm、重量2.7gを測る。

出土土器の年代的な位置づけとしては、包含層出土資料のため明確ではないが、扁平打製石斧の存在などから縄文時代後・晩期の所産である可能性が高い。さらに当遺跡では図示した以外に、多量の腰岳産黒曜石剥片が出土しており、いずれも規格的な剥片剥離を眺みとることのできない不定形剥片である。こうした不定形剥片の急増は北部九州地域においては縄文時代晩期から顕著になり、「十郎川型剥片剥離技術」と呼称されている。これらのことから当遺跡から出土した土器を、縄文時代後・晩期の所産として位置づけることは妥当な見解と言えるだろう。

IV ま と め

西遺跡は、植生低地中央を南流する前場川により形成された河岸段丘面とみられる平坦面上に展開する。遺跡のある平坦面は東西に狭く、西側の背後には高山(103m)の東麓丘陵先端部が約30mに迫る。また、遺跡の東側には2m前後の崖がある。今回の調査では、掘立柱建物4棟、土坑24基、溝2条、不明遺構7基、柱穴約170個の遺構が確認された。遺構及び遺物包含層からの出土遺物は、土師器、瓦質土器、磁器等の11~13世紀頃のものが大半を占め、この地に中世の集落が展開していたことを確認したが、遺跡の北側に隣接する周辺地域については、予察調査でも若干の遺物の採集のみで、遺構は確認できなかった。その原因としては、発掘調査対象地外の周辺は宅地として長期間使用され地山の削平が進んだことが考えられる。集落は遺跡周辺平坦面及び緩斜面に広がる可能性は高いと考える。

集落南西側から北側にかけて堆積が認められた遺物包含層のトレンチ調査により、調査区中央より南西方向に標高を下げ、調査区西側より南東方向に標高を下げる浅い低湿地の旧地形を検出した。これは、周辺水田の平面形状の観察により、この旧湿地は遺跡の南東より集落南西側に入り込む谷筋の最高位付近である可能性も考えられる。このことから、今回検出された集落は、谷沿いに広がる狭い平坦面に展開する集落と推定でき、主要な遺構も谷の上位部に掘り込まれている。集落の立地条件としては、あまり良好とはいえない。

遺構・遺物包含層内より須恵器の器台が1点、高坏の一部とみられる破片が1点、須恵器小片などが出土した。古墳時代の遺構は確認されなかったが、周辺高位地域からの流れ込みの可能性もある。遺跡近辺に古墳は確認されていない。しかし、前場川を挟んで遺跡の東側約500mの地点には、高山古墳群、中村道田古墳群があり、遺跡の西側丘陵部及び周辺平坦面上にも古墳または古墳時代の集落が埋存する可能性もある。

泥質片岩製の扁平打製石斧、玄武岩製の石鎌、黒曜石製の石鎌・楔形石器・剥片、水晶製スクレイパー等石器の出土は多種にわたっており、縄文土器の小片も出土したことから、遺跡周辺高位地域が縄文人の活動エリアであった可能性は高い。また、泥質片岩は小野田市本山峠周辺(遺跡より南東約13km)で見られる。調査により、近世陶器とみられる破片も出土しており、西遺跡一帯では縄文時代から中・近世の間、人々の暮らしが断続的に営まれたと言えよう。

次に、山陽町植生に位置する西遺跡の立地条件について考える。古代には、都と太宰府を結ぶ山陽道が遺跡の南方の周防灘沿岸を通過していたとされ、『延喜式』に記されている山陽道駅家5駅の中には植生の駅家がある。古代の山陽道の所在、ルート、駅家の所在地等は確認されていないが、西遺跡が古代の山陽道からそう遠くない場所に立地していたものと推定できる。14世紀後半、九州探題となって筑紫に下向した今川了俊の通行道筋を記した紀行文『道ゆきぶり』の中に、あさ(山陽町)泊—羽ふ(山陽町植生)—うすは瀧・小島(下関市)の記述がある。また、文禄の役にあたっては、秀吉自ら「天神国—植生—赤間関に泊まり」と記録している。近世の山陽道は現在の山陽町厚狭—山陽町福田(遺跡より約3 km 北東)—下関市吉田をルートとし、植生回りの利用は抑制されたが、植生浦の存在により、山陽道の支線としての役割は持ち続ける。西遺跡は、東西交通路としての山陽道と密接な関係を持ちながら、営まれた集落の可能性はあると考える。

参考文献	下中邦彦	『日本歴史地名大系・山口県の地名』	1980	平凡社
	竹内理三	『角川歴史地名大辞典・山口県』	1988	角川書店
	山口県教育委員会	『歴史の道調査報告書・山陽道』	1983	
	山口県教育委員会	『歴史の道調査報告書・赤間関街道』	1996	
	山口地学会	『山口県の歴史図鑑』	1991	

図版 1



西遺跡近景（北より）



西遺跡全景（東より）



西遺跡東側（東より）



SX7周辺遺構（東より）

図版3



SK 5 遺物出土状況 (西より)



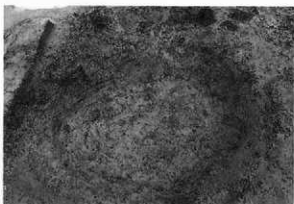
SK 5 完掘 (西より)



SK 10 遺物出土状況① (東より)



SK 10 遺物出土状況② (北より)



SK 10 完掘 (東より)



SK 11 遺物出土状況① (西より)



SK 11 遺物出土状況② (南より)



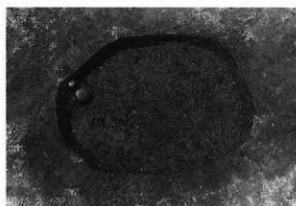
SK 11 完掘 (西より)



SK12遺物出土状況① (南より)



SK12遺物出土状況② (東より)



SK13遺物出土状況① (南より)



SK13遺物出土状況② (南より)



SK13完掘 (南より)



SK14遺物出土状況① (東より)



SK14遺物出土状況② (東より)



SK14完掘 (南より)

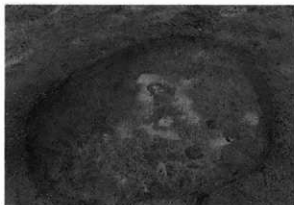
図版 5



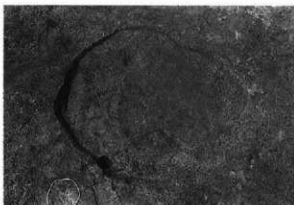
SK15遺物出土状況① (西より)



SK15遺物出土状況② (西より)



SK14・15完掘 (東より)



SK17完掘 (南より)



SK9完掘 (南より)



SK19土層断面 (南より)



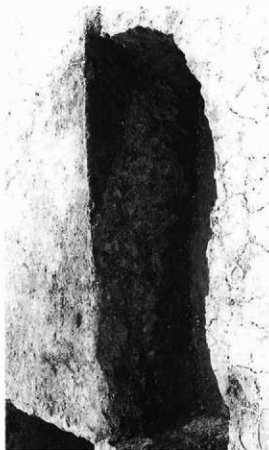
SK6完掘 (東より)



SK6土層断面A南側(西より)



SK6土層断面C北側(東より)



SK6土層断面A北側(東より)



SK6土層断面B東側(北より)

図版 7



SK6土層断面D東側(北より)



SK7遺物出土状況(南より)



SK6土層断面C南側(西より)



SK6土層断面D西側(南より)



SP42遺物出土状況（西より）



SP53遺物出土状況（東より）



SD2遺物出土状況①（東より）



SD2遺物出土状況②（東より）



SK20・21・22・23・24完掘（東より）

図版 9



TR 2 完掘 (西より)



TR 3 完掘 (西より)



TR 4 完掘 (南より)



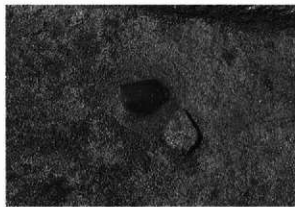
TR 5 北側完掘 (北より)



遺物包含層内遺物出土状況① (上層)



遺物包含層内遺物出土状況② (上層)



遺物包含層内遺物出土状況③ (中層)



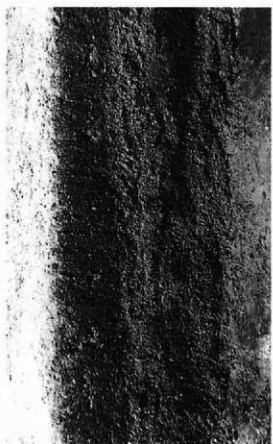
遺物包含層内 礫・流木出土状況 (下層)



TR 3 中央北壁土層断面 (南より)



TR 5 北側東壁土層断面 (西より)

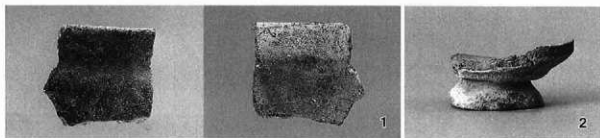


TR 3 西側北壁土層断面 (南より)

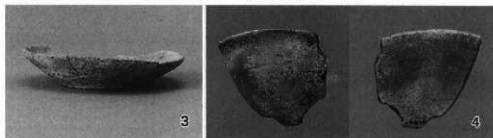


TR 3 東側北壁土層断面 (南より)

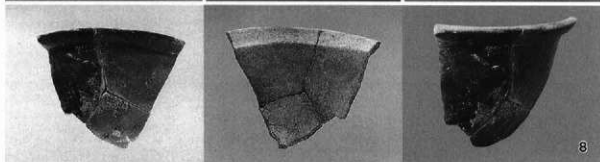
図版11



S B1関連出土遺物



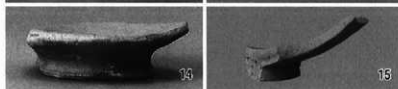
S K 5 出土遺物



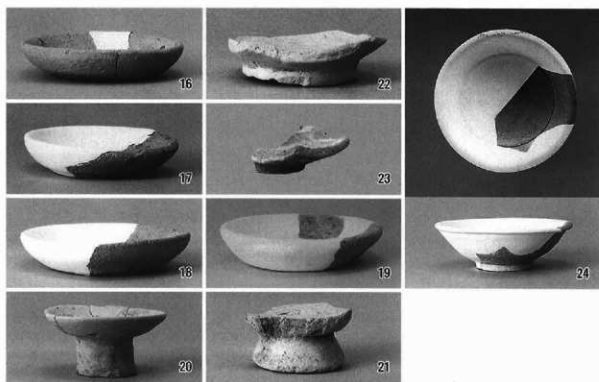
S K10出土遺物



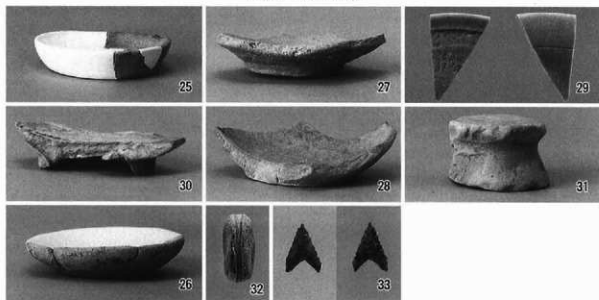
S K11出土遺物



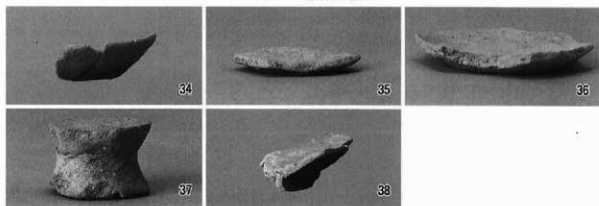
S K12出土遺物



SK14・15出土遺物

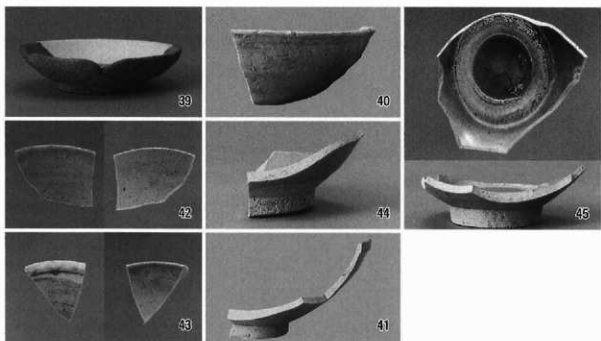


SK6・7出土遺物

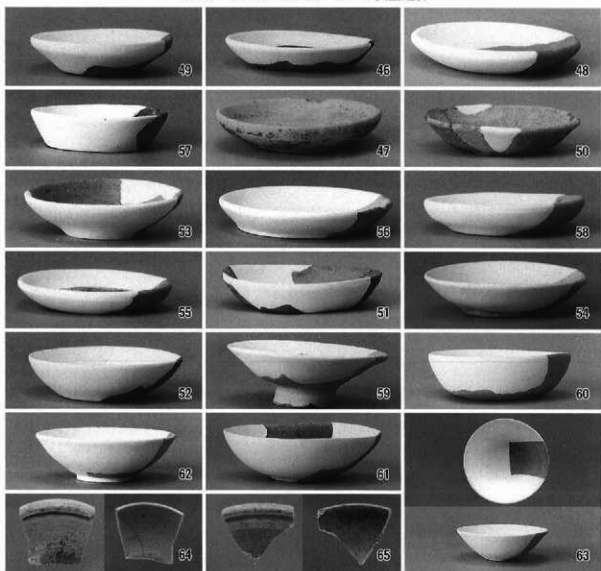


SK9・13・16出土遺物

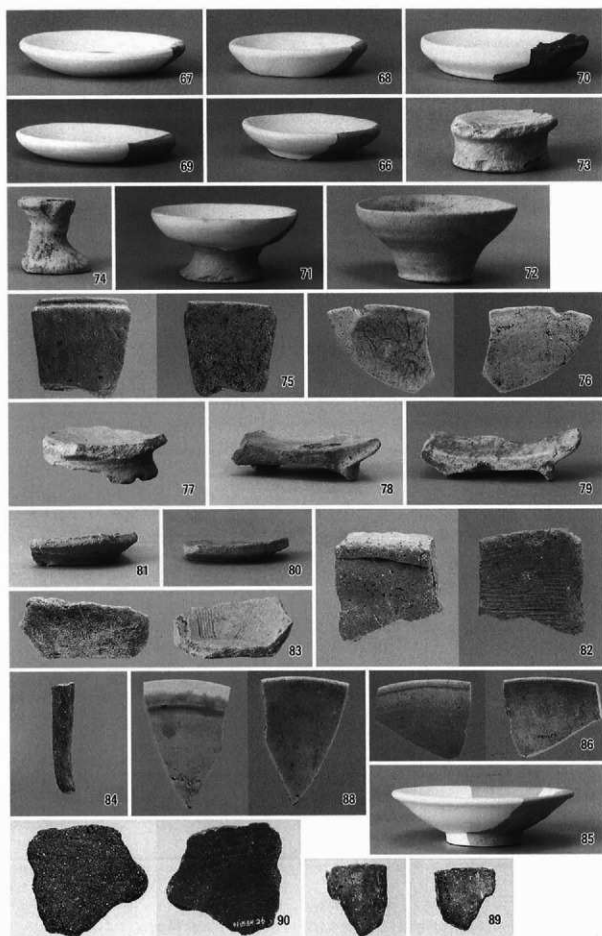
図版13



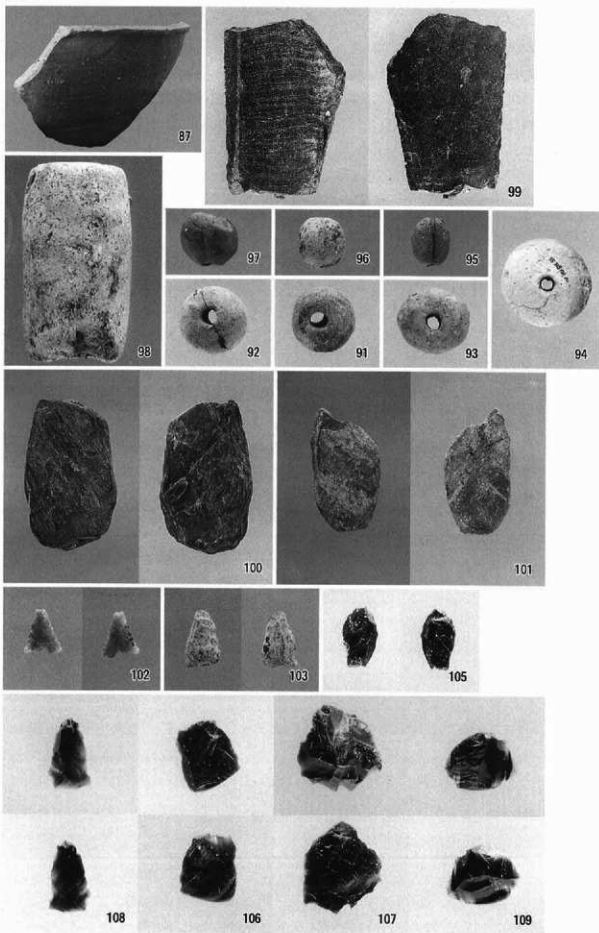
SD 2 SP 16・42・53・60・75出土遺物



SX 7 出土遺物



遺物包含層内出土遺物①



遺物包含層内出土遺物②

報 告 書 抄 録

ふりがな	にしいせき
書名	西遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	山口県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第29集
編集著者名	西田 宏 小南 裕一 池山 正
編集機関	山口県埋蔵文化財センター
所在地	〒753-0073 山口県山口市春日町3-22 TEL083-923-1060
発行年月日	西暦2002年3月27日(平成14年3月27日)

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′	東経 ° / ′	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしいせき 西遺跡	やまぐちけん あきこん 山口県厚狭郡 さかようちょう 山陽町大字 ほのおざにし 植生字西	35422		34° 2' 28"	131° 5' 20"	20010423 } 20010712	1,000	国道建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西遺跡	集落跡	中世	掘立柱建物 4棟 土坑 24基 溝 2条 不明遺構 7基 柱穴 169個	縄文土器 須恵器 土師器 瓦質土器 青磁 白磁 土製品(土玉・土 錘) 石器(扁平打製石 斧・石鏃)	河岸段丘面上に中世の集落跡を 確認

山口県埋蔵文化財センター調査報告 第29集

西 遺 跡

2002年3月

編集・発行 財団法人 山口県教育財団
山口県埋蔵文化財センター
〒753-0073 山口市春日町3-22

印刷 見玉印刷株式会社
〒755-0008 宇部市明神町3丁目4-3
